

元龜四年正月における武田信玄の 越年の場所「刑部」について

齋 藤 典 男

一

武田信玄は、元龜三（一五七二）年十月三日に甲府を出発、いわゆる西上作戦を開始した。諏訪・伊那を経て青崩峠から遠州に入り、十一月下旬には二俣城を陥し、徳川家康の引馬城（のちの浜松城）に向かった。そして、十二月二十二日の「三方ヶ原合戦」の後、「刑部（おさかべ）」の地で越年し、翌年正月に野田城（愛知県新城市）を攻撃した。

この時の越年所である「刑部」について、従来から静岡県引佐郡細江町刑部といわれているが、具体的にはどの場所であるか比定されていない。近年、信玄に関する書籍がおびただしく刊行されているが、これに関してはいずれの書も同様である。

昭和六十三年三月、山梨放送テレビの「シリーズ武田の歴史」の取材で三方ヶ原の調査をした際、筆者はこれをつきとめてみようと思ひ、信玄本陣の場所といわれる古碑を発見した。本稿は、これについての報告をするものである。

二

「刑部」という地名は、浜松市三方ヶ原町の北に位置する静岡県引佐郡細江町刑部であることは、周知の事実であるが、現在の刑部の地内には信玄の本陣が置かれていたと、伝える場所はみられなかった。

「刑部」には、刑部城跡が残されているが、細江町の説明板に「阿王山紫城とも呼ばれた。この城は、三方を都田川で囲まれた要害の地に築かれました。戦国時代・永禄十一年十二月（一五六八）この地の人々が、この地に城柵を築いてたてこもって家康の軍と戦いましたが、敗れてしまいました。今も当時の武者はしりや大きな井戸が残っています。姫街道は、この城の東側を通って落合川の渡し場へ通じていました。」とあり、信玄の本陣とは関係ないことがわかり、また城跡の規模も小さく大軍の駐屯は考えられない。

また、刑部の地は、三方ヶ原からみると、一度沢を下って台地へ上り、この台地をふたたび下って刑部城の南に出て、東にまわっていく（現在は、城の西側が切通しとなり、直進して落合橋を渡る）。

この台地は、三方ヶ原より低く、面積もはるかに狭く、浜松の家康を牽制しながら年を越すのには、ふさわしくない地形である。しかも、その数二万とも三万ともいわれる大軍の夜営の地としては、あまりにも狭い土地である。

こうして刑部の地を、東西・南北に調査したが、それらしき場所がなく、細江町役場を訪ねた。

そして結論は、『細江町史』資料編四（昭和五十九年三月刊）のなかに、載せられていた。これによれば、細江町中川字前山（現在は湖東）に立てられている「史蹟」の碑の所が、信玄の本陣であったという。これは、昭和三十六年三月二十日刊行の「細江のあゆみ」を再録したものであるが、いままで紹介されたことがないと思われるので、つぎに主要部分を引用してみよう。

三

史蹟（中川の前山）について

気賀から浜松行ききのバスに乗り長坂の県道を登りきって間もない左側に、史蹟と刻んだ石碑が立っている。此処は「花いっぱい」運動で、湖東の婦人の方々によって草花が植えられた。毎年、コスモス、百日草、サルビアなどが咲き乱れている。石碑の後方には墓石が花の中から首を出している。又石碑の傍に堀川城の戦死者を葬った円頓寺があったという立札がある。此の前山の道を通る人は随分多いことと思うが、何の史蹟かと疑問を懐かれる方があろうか。どうも問題にされていないように思われる。然し少くとも此の地方に住んでいる方々と其ことについて知悉しているべきだと思われるので次にその史蹟について記して見ようと思う。



信玄本陣の地に建てられた石碑

先ずこの史蹟とある石碑の裏に刻みつけられてある文を読んで見よう。それは漢文であるが、解り易い現代文に改めると、次の通りである。

元龜三年十二月廿二日武田信玄西上の途次三方原に於て徳川家康と戦い大いに之を敗り旗鼓堂々として来り此の地に随す。附近兵馬を養い軍を駐むること十五日。翌天正元年一月七日出発、東参地方に向う。偶々病を獲て四月卒す。当代の英雄武田氏天下の覇を称えんと欲すること久し、然りと雖も上杉氏兵を構え進むこと能わず。晩年三方原の大勝を獲西途僅に其の緒に就くと雖も遂に終る。ああ惜しむべし。

大正十三年一月二十六日

皇太子殿下御成婚奉祝記念

中川村長 村上太郎選文誌之

これによると、中川村長であった村上太郎氏が御成婚奉祝記念として建てた石碑で、史蹟というのは元龜三年に武田信玄が三方原の戦で勝利を得、此の地に来て軍を駐めたというのである。因に村上太郎氏は三方原の戦について、其の造詣が深く、諸所で三方原合戦の講和をされた方であった。大正時代に筆者も同氏の三方原合戦の講和を聞いたことがあった。二時間、三時間の長講と覚えてゐる。氏は石碑を立て、前記のような文を作つて石碑の裏に刻んだのであるから、氏の作られた「三方原戦記」といったような文書か、或いは、印刷物がありはせぬかと中川の方に調べて願つたが、そうしたものが遂に見当たらなかつた。

さて村上氏の石碑の裏の文章については、次のような疑問を生じる。(1)「旗鼓堂々来り此の地に陣す」とあるが、此の地はどここというのであろうか。(2)「武田信玄西上の途次」とあるが、この時信玄は果して西の方、即ち京都に上ろうとしていたのであろうか。(3)信玄が此の地に軍を駐めたのは十五日とあるが、果してそうであつただらうか。等である。

最近高柳光寿氏が「三方原の戦」という本を著された。それらによると、前記村上氏の文の記事と異なる点がある。それらについて次に記して見ようと思う。

(一) 信玄の遠州入り

前記(2)「武田信玄西上の途次」とあるように信玄の遠州入りは、遠州を攻略して三河を経て京都に上る途次であつたであらう。いやそうではない。遠州入りは今川氏及び徳川氏の領地を手に入れようとしたものだとする二つの想像説がある。本当のことを眠れる信玄

を地下から起して聞くよしもないが、当時の英雄は誰しも上洛して天下の覇者となろうと考えて居たらしいから、信玄も上洛の夢を描いていたに相違ないと思われる。越前の朝倉氏、近江の浅井氏等それを期待していたようである。然し、信玄が遠州を攻略し得ても三河を経て上洛するには幾多の困難が予想されるから、深慮遠謀の信玄が遠州を手に入れれば、直ちに易々と上洛するような早計は考えなかつただらうとも思われる。要するに其の機が熟するか否かによつて決すると考えていたであらう。

次に信玄の兵力や、いつ甲府を出発したか、又どの道を経て遠州に入つたかということが問題になつてくる。信玄の出陣は元龜三年十月三日(新曆十一月十八日)甲府出発、其の兵力は「甲陽軍鑑」には三千四百五騎とある。「浜松御在城記」には四万、旧参謀本部の「日本戦史」には三万とある。どれが本当か、信用の出来る数ではないようである。結局の確な数は不明ということになる。甲府から信濃の飯田にいで、青崩峠を越え秋葉山の麓の犬居に出たらしい。飯田から西部遠江(浜松)へ出る近道であると共に犬居城主天野氏は武田方に味方していたようであつたので、その案内もあつたことと思われる。(中略)

信玄が遠州に入つての手はじめは袋井方面への進出であつた。袋井の西方木原、西島の城を十月十三、四日頃攻略したとすると甲府出陣後十日を経過したことになる。次に見付の西方一言坂(ひとことざか)で家康の軍と戦つた。伝うる所によると家康は武田軍に対し反撃に出ようとしたが、本多忠勝の諫めによつて浜松に退却するに到つたということである。(中略)

武田軍は一言坂から北進、句坂城(さぎさか)を陥し、いれ二侯に

向った。二俣城は二俣の城山にあって家康は中根正照を主将とし、松平康安、青木貞治を副将として守らせていた。信玄は勝頼を大将として十月十九日頃之れを攻めさせた別に兵を出して浜松方面から家康軍の来攻に備えた。二俣城は天険に拠った城で武田勢もなかなか攻略が出来なかったが遂に城の水の手を奪うことに成功したので開城せしむるに至ったらしい。城兵は天竜川の水を汲み上げていたが、その井楼の釣瓶縄を切られてしまった。即ち水を汲み上げることが出来なくなったわけである。(中略)

(二)三方原の戦

信玄は二俣城の修築を命じたり、二俣と信濃の間の道路を修築させたが、それが出来上ったので十二月二十一日諸軍に出発準備を命じ翌二十二日、二俣攻略の当時から陣營を敷いていた合代島(ごうたいじま)を出発した。神増(かんぞう)で天竜川を渡り南方に向かい秋葉街道を南下した。以下武田勢の行動は高柳氏の三方原の戦に記す所によることにした。有玉附近から右に折れ欠下(かけした)から追分に出た。又支隊は中瀬から笠井に出で、市野から平(ひら)を経て小豆餅に出た。大正の頃村上太郎氏の三方原の戦の話によると神増の渡しから小松のあたりを経て追分附近に出たと聞いたように覚えている。天竜川に今の様な橋がなかった昔、二俣附近は水が深くて人馬の徒渉が出来ないが神増附近は渡河の便があつたらしい。若し信玄が直に東参地方へ行こうとするならば、宮口、都田、気賀、又は伊平方面に向うであろうが、追分附近に進出するのを見れば浜松の徳川軍と一戦を辞さない心組であろうか。

高柳氏の三方原の戦によると次のように記してある。武田軍は追分附近に於いて大休止をとり陣形を整えた。それが午後一時頃と想

像される。そして武田軍は祝田方面に向かって北進しはじめた。当時の姫街道は追分から大谷を経て気賀に通するのでなく祝田坂を下って祝田に出で三方原台地の裾を西に刑部を経て気賀に通じていたらしいと高柳氏は言われている。若し追分から大谷を経て気賀に通ずる道が其の当時あつたならば信玄は祝田の方へ行く筈がないと言うのである。信玄の軍が浜松に向わないで北進するのを見て、これは三河に向かって進軍するものと家康は看取し、徳川軍は武田軍と接触を保ちつつ北進し、いつでも敵を攻撃することが出来るように左右に展開して所謂鶴翼の陣形をとったということである。(中略)

祝田坂上から浜松城迄は十余キロである。戦に破れて敗走する徳川軍を追撃する武田軍の勢は猛烈であつたようだ。徳川方の戦死者は一千余と記されている。家康は玄黙口から浜松城に逃げ帰ると、其処を守っていた鳥居元忠に命じて城門を鎖さないで開放することを命じたということである。そこへ武田軍の先鋒の者どもが来て見ると、城門は開いている。赤々と篝火が焚えている。そこで武田の兵は攻め入らなかつたそうである。(中略)

此の夜武田方は犀ヶ崖の北方に陣していた。徳川方は敵陣を偵知し銃手十六人を集めて信玄の本営を襲った。地理に暗い武田方は夜闇で兵力が分らぬので遂に犀ヶ崖に落ちて死んだ者が多かつたといわれている。又布橋を犀ヶ崖にかけておいて敵兵を崖に落したなど種々な話が伝えられているようだ。「服部半蔵武功記」には、

徳川方は敗軍の際地理をよく知っているので犀ヶ崖を大廻りに廻つて退いたが武田方は不案内なのでまっすぐに迫つて来たので此の崖に落ちて兵を損した。

と記してあるようだ。これは事実であろうと思われる。信玄が犀ヶ

崖の北方に陣したのは敵襲撃の備えに此の崖を利用したのだとも考えられる。

浜松城の戦については「酒井の太鼓」というのがある。昨年九月二十一日、朝日新聞の遠州版に次の様に記してあった。

元龜三年（一五七二）徳川家康が三方原で武田信玄に敗れ浜松城に逃げこんだ時、城は武田勢に囲まれ、家康も決死の覚悟をしたところ、酒井左衛門が一計を案じて城楼にのぼり太鼓を打ちならした。武田勢はこれを見て計略があるものと思い囲みを解いてしまったという。この太鼓というのが磐田市小学校にあって毎朝の時を報じていたが破れて「酒井の破太鼓」として知られていた。最近皮を張りかえ昔のおもかげをなくした。（中略）

（三）刑部の駐軍

信玄は犀ヶ崖の北方の陣營で首実検を行い十月二十三日軍をまとめて北進、三方原台地を下り刑部に陣して越年したといわれている。又「菅沼家譜」には油田に陣したとあるそうである。村上太郎氏の文中「旗鼓堂々として来り此の陣に陣す」という此の地は刑部である。其の昔は前山とその東附近までも刑部といったものと思われる。

十二月廿八日に信玄は越前の浅倉義景からの使に逢い、其の使者に託して義景に書状を送った。それには三方原の一戦で大勝を得、遠参両国の者及び岐阜からの加勢数千を討ち取ったと記してある。又廿九日には松永久秀に三方原合戦の勝利を報じている。或は上洛をはめたのかしたのかも知れない。正月十日には本願寺光佐が書状を信玄に送って勝利を祝している。二月二十日に近江の浅井長政から信玄に書を送って、三方原の勝利を「耳目を驚かした」といっている。尤もこれらの書状は信玄が刑部を出発してから入手したもので

あろうといわれている。

村上氏の文には「駐軍十五日翌天正元年一月七日出発東参地方に向う」とあるが、高柳氏は一月十日頃出発といっている。信玄の軍は気賀井伊谷を経て奥山の陣座峠を越え東三河野田城の攻囲に向った。（中略）

吾等此の土地の者は元龜、天正の昔に於ける刑部地方の人々が此の信玄の駐軍によって受けたであろう苦勞を思わざるを得ない。武田軍の軍規は厳しかったであろう。従って民家を苦しめるような不届な者は居なかったと思われる。土地の侍をなつける為には手を尽したであろう。然し何万という軍兵と多数の軍馬が十数日に亘って駐屯するのだから、その食糧の徴発は民家を煩わしたに違いない。それも年の暮から正月にかけてである。当時の人々が大変な目に逢ったと想像されるのである。

四 信玄の死について

村上氏の文には「東参地方に向い偶病を獲て四月卒す」とある。信玄が東参に行く道を高柳氏は陣座峠を越えたとし、「日本戦史」には本坂街道を経て三河に入るとある。当時本坂街道に当る三ヶ日地方に徳川輩下の者が屯ろして居たから、陣座峠の道によつたとするが無難と思われる。武田軍の野田城は手間どつたようであるが、この攻略と三方原の勝利は京都方面に伝わって相当の影響を与えたということである。信玄は野田城攻囲中に病を得て、後に長篠に滞在、又鳳来寺に病を養ったとも言われている。田口を経て信濃に向う途上駒場で四月十二日死去したということである。信玄の病については種々と伝えられているようだ。刑部に陣していた頃、病を養っていたので、武田軍は出発しても信玄は一月中旬頃まで滞在、大分

快方に向ったので野田に発ったそうである。又野田城攻囲中信玄は鉄砲玉にあたつて負傷しそれが為に死亡しても武田方は三年其の死を秘していたようである。(中略)村上氏の文に「当代英雄武田氏天下の覇を称えんと欲すること久し、然りと雖も上杉氏兵を構えて進む能わず。晩年三方原に大勝を獲西途僅に其の緒に就くと雖も遂に終る。ああ惜しむべし」とある。まことに其の如く三方原の大勝は西上の夢が開けたと心ひそかに信玄は満足していたであらう。村上氏の言の如く「あゝ惜しむべし」と言わざるを得ない所である。(「細江のあゆみ」昭和三十六年三月二十日発刊より抜粋)

四

以上のように、旧中川村前山あたりまで刑部郷にふくまれていたと考えられるので、この場所であり、と記されている。

この前山の地は、現在は住宅地であるが、三方ヶ原台地の最北端に位置し、かつては浜松城を遠望することができたはずである。浜松の家康を制しながら本陣を置くのには、絶好の場所である。

近世において、浜松から浜名湖の南の今切りを渡り「新居浜の関」

を経由する東海道を通らずに、浜名湖の北を通る「姫街道」と呼ばれた間道がある。本道である東海道を通過するのが苦手な婦女子が多かったので名付けられたといわれているが、街道の所々に松並木が残り、往時の面影を伝えている。

現在の浜松城跡の西から国道二五七号を北上すると、三方ヶ原合戦の時に信玄が本陣を置いたという細江町保田にいたるが、途中の東名高速道路の手前の三差路「追分」を左にいくのが姫街道で、浜松市吉野をへて細江町湖東となり、街道ぞいの右手に『古蹟』とのみ記された高さ二メートルほどの石碑が建てられている。説明板や標識などが、まったくないので見過ごされてしまう存在であるが、三方ヶ原を訪れる機会があるならば、ぜひ立ち寄ってほしい所である。

武田信玄が、五十三年の生涯の最後の正月を送った場所だからである。

筆者の無理な注文に心よくつきあってくれた、山梨文化学園の望月設男氏・山梨放送の山本公和氏に感謝する次第である。

(市史編さん委員)